



首里城京の内跡における発掘調査区(南西より)
沖縄県立埋蔵文化財センター提供

「首里城は察度が建てたのか？」
ふるさとの偉人「察度」
首里城の正殿などが火災で焼失して、今年で2年が経ちました。首里城正殿は、中国と日本の建築様式が取り入れられた琉球独自の建造物です。そのため、中国との進貢貿易を軸に日本や東南アジアとも貿易活動を繰り広げた「琉球」を表出する、いわば沖縄のシンボルともいえる存在でした。この首里城は、いつ、誰の手によって建てられたのでしょうか？



首里王府が編纂した「中山世譜」には、察度は洪武25(1392)年に数十丈(一丈約3m)の高さのある「高よそり」と呼ばれる高樓で遊覧していたと記されています。これについて、沖縄考古学の父とも称される多和田真淳氏は、自身の論文の中で、この高樓は首里城の京の内にあたる部分に建てられたと推測しました。これを物語るように、首里城内の京の内跡での発掘調査では、最も標高の高い地点で瓦葺き建物の礎石の配置が確認されたほか、14世紀前半〜後半頃の野面積みなどの遺構も検出されています。ただし、察度が遊覧した高樓が首里にあったのか、浦添城にあったのかはわかっておりません。

また、首里城の中心的な建物である正殿は、発掘調査の成果によって、最大で6回に亘って改築されていることがわかっています(全7期)。その一番古い時期の年代は、14世紀後半と推測されていますが、遺構が後代の建築物に壊されているため、正確な年代は不明確です。

首里城は察度が建てたのでしょうか？その答えは、まだはっきりしておりません。ただし、その可能性は捨てることができず、このことが私たちの抱く「察度像」をよりミステリアスにしているのではないのでしょうか？謎に満ちた察度の歴史ロマンが、今後も色あせることはありません。

【問い合わせ】

市立博物館 ☎870-93317

察度生誕700年記念
パネル展によせて



みなさんは察度をご存知ですか？彼は、現在の宜野湾市に生まれた英雄です。本島中部を治めた中山王として、初めて明(中国)との交易を行い、琉球の繁栄の基礎を築いた偉人として伝えられています。

今年(2021年)は、察度の生誕700年になります。博物館ではこれを記念して、察度について多くの人に知ってもらいために、パネル展を開催しています。

このパネル展では、察度の人物像や功績、今も残る史跡等について、関係する史料などを基に、初めて知る人でも分かりやすいように説明しています。

さらに、市内の小中学校で、移動パネル展も開催しています。このパネル展を通して、子ども達が察度について少しでも興味を持つていただければ幸いです。

また、当館では察度についてまとめたリーフレットも配布しています。このリーフレットを片手に、察度にゆかりのある文化財を散策してみましよう。

この700年という節目を機に、察度の功績とその軌跡を、学んでみてはいかがでしょうか。



映像コーナー ▲
展示の様子 ▶



Webもチェック!



【問い合わせ】

市立博物館 ☎870-93317

